

きめ細かな相互コミュニケーションから見つける自分に合った治療 前向きな治療生活のために 自分が納得できる腎代替療法を選ぼう

日本における透析患者数は約34万人^{*1}、約70歳という治療開始の平均年齢^{*1}は、まだまだ人生を謳歌できる年代だ。しかし末期腎不全の治療は患者とその家族の日常に大きく影響するため、どのような治療法を選ぶかは大きな決断となる。この時、患者とその家族にとって大きな支えとなるのが、医療者と患者と一緒に自分のライフスタイルに合った治療法を選択する「シェアード・ディシジョン・メイキング(協働する意思決定/以下SDM)」だ。これについて、患者に寄り添う看護師の立場からSDMの普及につとめる内田明子看護師に話を聞いた。



社会福祉法人 聖隷福祉事業団
聖隷横浜病院総看護部長^{*2} 看護学博士
腎臓病SDM推進協会 幹事
内田 明子 看護師

患者の希望を真摯に聞き出す 看護師のヒューマンケア

末期腎不全の腎機能を担う腎代替療法には、血液透析、腹膜透析、腎移植がある。なかでも血液透析を受ける患者は透析患者全体の約97%^{*3}と最も多い。血液透析を実施する病院数も多く、治療は医療者に任せられることができる。ただ、通常週3回程度の通院が必要で1回の治療に約4時間を要するため、自宅近くに病院があるなど通院に負担のない環境が望ましい。一方、在宅で治療ができる腹膜透析は、手動もしくは自動化された医療機器を用いて腹腔内に透析液を貯留することにより身体に溜まった余分な水や老廃物を取り除く。患者もしくは家族が治療を行い、透析液を注入するために腹部に埋めた

可能となり、術後のケアも比較的小さいが、日本はまだ臓器提供の条件など普及に向けた課題が多い。「医師は症状や検査データをはじめとした医学という科学的根拠に基づいた診断で個々の病状に適した腎代替療法を判断できます。しかし、同じ末期腎不全の患者さんでも、ライフスタイルや生活環境により持っている希望は様々です。治療と暮らししていく患者さんが腎代替療法の選択肢を理解し、自分の生き方に合った治療を自己決定できるように、SDMと呼ばれる治療選択のプロセスが要となります。」

「看護師は、末期腎不全という現実に直面した患者さんに対し、いきなり治療法の詳細説明はしません。大切なのは、患者さんに寄り添い、治療開始後の暮らしを一緒に考えていくことです。子供が独立したので好きなことを始めたい、今の仕事を続けていきたいなどの希望は、腎代替療法の選択に大きく関わります。それに個々で心境の変化する様も異なるため、治療選択のプロセスを均一に合理的に進めることはできません。看護師は患者さんの日常生活や趣味などに軸を置いた会話を重ねながら、治療選択に向き合える時に手を差

現行の腎代替療法も暮らしの変化で見直せる

SDMを通じたプロセスは初めて腎代替療法を受ける患者に限ったものではない。治療開始後の暮らしに変化が生じた時、現行の療法を見直したい時にも活用できる。「もちろん、医師はその都度患者さんに適した療法を勧めますが、子育てで家を空けられないため腹膜透析から始めた主婦の方が育児を終えて血液透析に移行したり、血液透析を続けていた患者さんが、趣味の時間を増やすために腹膜透析に変えたりすることもあります。腎代替療法は暮らしに直結するのでご家族の意見も伺いますが、治療を続けながらも希望を叶えたい患者さんが選択肢を理解し自己決定することで、治療に対する責任感も生まれるのではないでしょう。近年、開催している腎代替療法に関するセミナーには、長年治療方法を変えられないと悩んでいた患者さんも多く参加されています。」

「患者さんの気持ちや暮らしは常に変わるといふことを念頭に、SDMを通じて医療者は患者ひとりひとりと繰り返し、丁寧に接していくことが鍵となります。現在、日本に血液透析を受ける患者さんが多いのは、従来、医師の診断に基づいたインフォームド・コンセント(患者に対し、医師が十分に情報を提供し、合意を得る)による治療選択が主流であったことも

要因と考えられます。SDMの普及でもっと治療選択の幅が広がる可能性を感じています。」
医療者が寄り添い、患者の意思決定を一緒に行うことで、患者は治療開始後の生活に様々な可能性を見いだせる。しかし、医師、看護師ともに多くの時間とマンパワーが必要なSDMに対し、医療制度として整備されることは必須の課題だとも内田看護師は語る。「患者さんやその家族に前向きな治療人生を歩んでほしい。そのためにSDMという手法があることをもっとたくさんの方々、そしてなによりも患者さんご自身に知ってもらい、積極的に看護師に話をしていたいただきたいと思っています。」

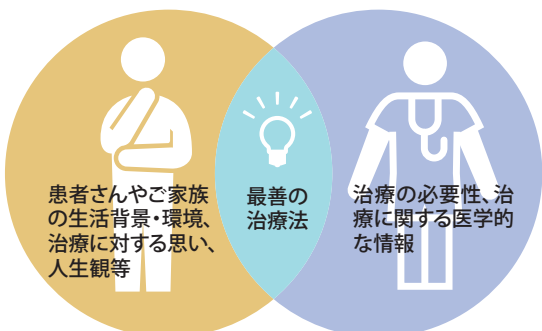


し伸べる準備をしています」

自分の希望を整理するにはどうしたらよいのか。内田看護師が幹事を務める「腎臓病SDM推進協会」では、腎代替療法の選択に面している患者に向けた冊子を発行している^{*4}。趣味や習慣などを記入する項目もあり、患者が家族とこれからの生き方を話し合うきっかけになると同時に、看護師との情報共有にも役立つ。同様にNPO法人腎臓サポート協会なども治療に際しての自分の希望を整理する方法や治療選択肢をわかりやすく紹介している^{*4}。

また、治療費や生活面の相談を受けられるよう、看護師はメディカルソーシャルワーカー、薬剤師などと連携したり、必要に応じて患者さんが直接相談できるように

あなたに合った治療を選ぶために



治療を考える上での大切なポイント

- 治療が必要なことを理解しましょう
- 治療の選択肢について理解しましょう
- 自分(や家族)の生活環境・ライフステージ、そして価値観等を医療スタッフに伝えましょう
- 医療スタッフと一緒に、どの治療を選ぶか考えましょう

出典(表):腎臓病SDM推進協会

*1 参照:『わが国の慢性透析療法の現況(2018年12月31日現在)』(日本透析医学会雑誌52巻(2019)12号)
*2 取材時(2020年12月)所属
*3 腎臓病SDM推進協会 <https://www.ckdsdm.jp>
*4 腎臓サポート協会 <https://www.kidneydirections.ne.jp/>